

研究

私 の 姓 氏 考 (一)

— 郷土史に見る「泥谷姓」について —

会員 泥 谷 捨 夫

佐伯史談第二十六号(昭和四十二年三月号)に、某部会員による「木立の歴史を採る」そして泥谷姓について考察する」との研究発表があり、泥谷姓を名乗る一人である筆者にとつて、ありがたく拝読しまして感謝しております。私もその後心がけていまして、研究不足の、蛇足ではあります。私なりに少々つけ加えさせて頂きたい。拙文を綴つてみました。

(1) 嘉吉元年(一四四一)八月、佐伯氏九代惟世(これづ)の時代、中国の雄藩大内義隆は、数万の大軍で佐伯堅田に攻め来た。沙月佐渡守・泥谷主馬助(主水亮)宇山城に籠り、機を見て出撃し、各隊協力の末、是れを大破大損害を興え、兵船三百余隻を捕つた」とあります。

(2) 大永七年(一五二二)十一月、佐伯氏十代惟治は大友氏の勘気なふれ、臼井長景の謀計により梅牟礼城を開城し、日向に落ちました。その節従う者二十余名の中に、餅原氏、野々下等と共に、泥谷將監がおり、父の跡を慕って堅田西野まで来た、子千代鶴一行に、辰高知に於ける父惟治の壮烈な最期を告げ、随行の佐伯伊賀・富田五郎共々割腹したとあります。

この日向落ちをはずされ、六十八名の家長が、百姓

に身と落としたと伝えられる中に、泥谷基兵衛・泥谷孫作・泥谷重左衛門があります。

(3) 天正七年(一五八〇)七月、佐伯十三代惟真の時代、日向の海賊が木立の入江に襲来、この討ち取った敵の首二十六の、殊勲者の中に、泥谷次郎・泥谷新三郎・泥谷志摩守は首二つ宛、泥谷基次郎は一つを討ち取ったとあります。

(4) 天正十四年(一五八六)十一月、佐伯氏十四代惟定の時日向(赤松)・朝日(赤松)・朝日(赤松)などを掃蕩しつつ北上する島津義久軍は、佐伯軍を屈服さすべく、僧玄西堂外十八名の勸降使を送つて来た。

これに対する梅牟礼城内の重臣會議、三十余名の中に泥谷肥前守・泥谷大和守がおり、前記勸降使十九名を奇兵隊に誘導、洲に飛び込んで逃げた一名を除き、全部を斬つた佐伯勢の中に、泥谷大吉・泥谷右京之進・泥谷志摩守・泥谷志摩がおります。

(5) 同年、これに激怒した島津勢は、二千余人の大軍をもつて大越一岸河内方面から来襲しました。この時切畑方面番五川原の守備隊長は、沙月大蔵・泥谷將監とあり、各隊には、泥谷左膳・泥谷右京之進・泥谷志摩守がおり、泥谷新次郎は敵軍追撃の折、堅田西野付近で討死すといわれています。

(6) 翌くる天正十五年、島津軍は日向路もとより、豊後へ侵入して大半を占領し、府内城で豪語していました。そこで遂に豊臣秀吉は大軍を催して島津討伐に踏み切り、羽柴秀長を総指揮とした三十万が、豊前小倉に上陸

したとの報に、到底勝目なしと考えた島津勢は、早々に撤退を以てした。その折、再三にわたって小城の佐伯軍に手を焼いている島津軍は、佐伯を避けて朽網から迂回して肥後路にまわり、一部が豊後・日向國境の梓紫にかかった時、佐伯惟定二千余の兵で迎え討ち、三百余人を討ち取っている。

この時の戦跡で、あがニ番備への隊長、泥谷右京之進を討ち取りました。

注一文中(内)は同名異人、(四)は同一人物である。

以上は中世室町時代以降の事だが、以下は二百余年経過した江戸時代毛利藩政の頃になる。

(甲) 文化十四年(一八七〇)毛利氏十代高翰の時代、切畑村常盤井路完成の折、詩歌献詠者三十余名の中に、泥谷憲(男女不明)がある。皆一詩一句なのに、可斐鶴寸と泥谷憲は、各二句ずつ献詠が記録されており、

(乙) 天保十三年(一八三二)、毛利十一代高泰の時、木立村出身泥谷元圭、日田咸宜園に入塾、紹介日田原新蔵と記されています。

(丙) 文久三年(一八六三)、毛利十二代高謙の時代、杉谷彦空蔵下の火薬製造所が爆発し、黒田潤吉焚死、泥谷第二郎重傷すとあり、外にも二三名死したのに、特に二名の名前が記録されているのを見れば、あるいは足輕ぐらゐの、下級武士だったかとも思われます。

以上が御土史書に見える泥谷姓であるが、女お筆者の目にもこれ他家の系図から拾えて、宮脇家系図(門前阿部氏蔵)に「泥谷将監妻へ」とあり、年代から推定し、惟定時代の将監と考えられます。

また、佐伯市橋佐古家の系図に「泥谷家に嫁す」と於多頓・於久米の二人あり、この女性の子が孫に、文蔵という名持ちあり、五所明神社の三十三段の石段を、米二俵(三十数貫)を背負い、下駄はきで悠々と登り、顔色もかえなかつたとの言伝えがあります。

現在の佐伯市木立、直川村(上直見)、弥生町赤木(原)の三か所に、泥谷姓を名乗る二、三十戸の集落があり、その外では旧佐伯市内如海濱に点々と二、三戸あります。これらの泥谷姓は、前記三集落の出身者です。従って、前に掲げた四の項の、佐伯惟治の日向落ちからはなされた家臣の中の、泥谷甚兵衛、泥谷孫作、泥谷重左衛門の三名が、木立・直川・赤木の三か所へ土着し、二居に仕えずの武士道的の考えから農民となり、子孫がふえたと推理するのは、無理でしょうか。

地名としては堅田に泥谷があり、上堅田の上城に泥谷口があるが、泥谷姓発生の地とは考えられず。しかし安部氏の言われるように、当時の為政者の政策によって分散させられたとすれば、筆者の知る範囲で、一番近い所では、大分市戸次町の下戸次に數十戸の泥谷姓がおります。県外では高知県幡多郡には、あちこちに泥谷姓が散在し、宮崎県児湯郡高鍋町にも多数の泥谷姓があり、いずれも確認が及びます。なお筆者の孫が名古屋市東郵便局に勤務しているが、同県碧海郡方面に泥谷姓が多数あるらしいと、報せて来ています。

以上、郷土資料に散見する泥谷姓を拾い、土地とりのつながりやざつと見ました。次回もつと掘り下げてこの姓氏について、身近なところを考察したいと思えます。

(つづく)
(筆者 弥生町赤木平原出身、現在同町赤木原居住)